

ドラマティック日本史第5弾

【狩野派】天才絵師狩野永徳が描いた『洛中洛外図 - 上杉本 - 』

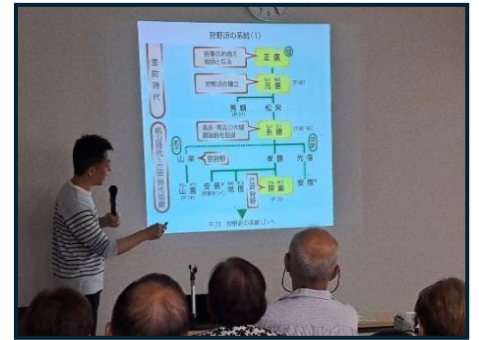
講師：若村 亮先生

日時：5月11日(月)

講義の概要

I. 日本絵画史の新時代を創った『狩野派』一室町時代～近現代～

狩野派は日本の絵画史上最大の画派を誇った。室町中期の幕府御用絵師狩野正信を祖として、以後、安土桃山時代から江戸時代にかけての約400年に渡って戦国大名や徳川將軍家の御用絵師として日本画壇の頂点に君臨した。



・絵師：狩野元信(1476年～1559年)

父・正信に続いて室町幕府の御用絵師として活躍した。水墨画(宋・元・明画様式)に大和絵の技法を取り入れ、力強い装飾性を持つ様式を大成した。桃山障壁画の基礎を確立した。

狩野元信の作品 『四季花鳥図』(大徳寺塔頭大仙院方丈)

・絵師：狩野永徳(1543年～1590年)

元信の孫。幼少時から祖父の指導を受ける。織田信長・豊臣秀吉に重く用いられ、安土城・大坂城・聚楽第などに豪壮雄大な障壁画を制作して、御用絵師としての狩野派の基盤を確立した。

狩野永徳の作品 『花鳥図』(大徳寺塔頭聚光院)、上杉本『洛中洛外図屏風』(米沢市上杉博物館蔵)

・絵師：狩野探幽(1602年～1674年)

永徳の孫。徳川幕府の御用絵師。瀟洒淡麗と形容される画風を確立し、水墨画・彩色画など幅広く活躍した江戸狩野派の画家。

狩野探幽の作品 『金碧障壁画』(二条城二の丸御殿)、『水呑みの虎』(南禅寺小方丈)

II. 上杉本『洛中洛外図屏風』(米沢市上杉博物館蔵)

狩野永徳が京の都を一望し、洛中と洛外の四季と、そこに暮らす人びとの生活風俗を描きこんだもの。およそ2500人もの人物が老若男女、身分、職業を問わず描かれており、さらに動物・植物・根遺書・祭りなど多くの要素を併せ持ち、日本美術を代表する作品。織田信長から上杉謙信に贈られたとされ、以後、米沢藩上杉家に伝来した由緒を持つ。(米沢市上杉博物館蔵)



〔講義後、懇親会を実施〕

講義終了後、12時30分から三府鮎阪急茨木店で懇親昼食会を実施した。